

玉川温泉地区と 仙北市の地域医療体制協調に関する研究



1

奈良県立医科大学 健康政策医学講座
加藤 礼謙

2

玉川温泉・新玉川温泉

- 秋田県仙北市田沢湖玉川渋黒沢にある温泉
- pH1.2と極めて酸性度が高い
- ラジウム鉱石である「北投石」(いわゆるホルミシス効果)
- 岩盤浴による温熱療法

1974年、阿部真平による「世界の奇跡・玉川温泉」が発刊され、癌が治ると噂が広がり、各種メディアでも取り上げられて、代替医療目的の湯治客が集まるようになったとされる。

玉川温泉の立地



- 仙北市田沢湖の市街地から公共交通で1時間以上
- 八幡平国立公園の中にあり、近くに医療機関がない
- 一部施設では看護師を常駐させているが医療行為はできない

玉川温泉で湯治客に急変が起こった場合には、離れた場所から救急隊が駆けつけ、長距離搬送して病院にかかることになる。

4

湯治客へのサポート体制の不備

- 玉川温泉は代替医療目的の重症の湯治客が集う温泉地でありながら、湯治に対する十分な医療サポート環境が整っているとは言えない。
- 最寄りの医療機関である田沢湖病院は平成18年9月に医師不足のために救急指定を返上しており、現在は60キロ離れた角館総合病院が受け入れをしている。

5

研究目的

本研究は、玉川温泉地区に重症湯治客が集まることで、周辺地域の医療体制にどのような影響を及ぼしているのかを調査し、問題点と対応の選択肢を整理することによって、湯治と周辺自治体の地域医療資源との協調体制を模索することと目的とする。

6

研究方法

- 仙北市に協力を依頼、仙北市や広域自治体消防本部などが持つ救急搬送データなどを収集する。
- 現地訪問し関係者への現状の聞き取り調査を実施する。
- 玉川温泉と類似する環境にある乳頭温泉郷の関係者にも聞き取り調査を実施し比較する。

7

結果 救急搬送データ①

年・消防隊	西本消防隊		田沢湖消防隊		合計	最頻月
	玉川への出動/総数	玉川への出動/総数	玉川への出動/総数 (%)			
平成18年度	35/133	25/310	60/443 (13.5%)	10月		
平成19年度	26/156	35/351	61/507 (12.0%)	1月		
平成20年度	23/142	13/319	36/461 (7.9%)	1月		
平成21年度	16/144	7/304	23/448 (5.1%)	2月		
平成22年度	17/170	13/309	30/479 (6.2%)	12月		
平成23年度	3/153	15/383	18/536 (3.3%)	5月		
平成24年度	2/149	17/380	19/529 (3.6%)	8月		
平成25年度	0/173	12/416	12/589 (2.0%)	5月		
平成26年度	2	10	12			

平成18～19年は両救急隊の全出動数に占める玉川出動の割合は12～13%だったが、雪崩事故の影響で、救急出動の頻度が高かった冬期間に、営業を自粛している施設があることや平成23年度からのドクターヘリ運用開始が救急出動減速に関係していると考えられる。

8

結果 救急搬送データ②

年	出動要請～現場到着		現場出発～病院着	
	最短	最長	最短	最長
平成18年度	19分	57分	20分	74分
平成19年度	18分	49分	36分	103分
平成20年度	20分	47分	38分	89分
平成21年度	22分	48分	40分	101分
平成22年度	19分	50分	35分	86分
平成23年度	19分	50分	38分	78分
平成24年度	24分	80分	45分	78分
平成25年度	20分	77分	40分	178分
平成26年度	25分	69分	78分	87分

平成18年9月までは田沢湖病院に搬送されていたが、救急指定返上により18年9月以降は角館総合病院に搬送されるようになった。そのため、出動要請から現場到着までの時間には殆ど変化はないが、現場出発から病院着までの時間が延長することになった。

結果

玉川温泉からの救急患者をどのように思っていますか？

9

田沢湖病院 院長・事務長

- 痛患者が多い。痛治療を途中でやめ、主治医の許可なく湯治に来ているケースが多い。重症の痛患者が何の情報も持たずに運ばれてくるのは医師として苦痛。勤務医師からは受け入れたくないという声も出た。
- 地域連携室が主治医を探して連絡を取り情報を収集する。
- 地元病院への転院希望が多く、民間救急車を手配し500キロ以上離れた搬送したことや、ヘリコプターをチャーターして岩手県沿岸部の病院に搬送した事例もあり、地域連携の業務範疇を超えている。

仙北市から温泉施設へ要望

- 温泉施設内の健康相談室看護師にサマリーを求めた。主治医の承諾をとって湯治に来るようにアプランスしてほしい。
- 宿泊業であり医療業でない。健康相談は宿泊者へのサービスであると聞き入れられず。

結果

田沢湖病院の救急指定返上について

10

- 元々は田沢湖地区唯一の救急指定病院。
- 平成16年までは常勤医6人体制、新研修医制度発足後、大学病院からの医師引上げで常勤医が3人まで減った。
- 平成18年9月、医師の一人が「救急対応による重労働」を理由に退職。常勤医師2名体制となり、救急受入れが困難になった。
- 平成17年度、救急受入れは291件でうち20%が玉川温泉からの救急患者。291件のうち25%は田沢湖病院で対応できずに、転送している。

結果

同様の立地環境にある乳頭温泉郷の場合

11

(乳頭温泉郷鶴の湯社長・田沢湖観光協会会長 聞き取り)

- 玉川温泉も乳頭温泉も医療から離れた無医地区である。
- 乳頭温泉郷はひなびた秘湯を売りにした観光客を集める温泉宿。救急依頼するのは蜂に刺されたなどの場合や転倒による外傷が時々起るくらい。
- 安心して温泉を訪れてもらうために、全施設で日本健康開発財団の「温泉入浴指導員」の資格を取得している。
- 乳頭温泉郷を含む田沢湖高原地域で発生する救急患者のためにも、田沢湖病院の救急再指定は必要だ。田沢湖病院院長に救急再指定をお願いしている。

結果

玉川温泉と乳頭温泉の比較

12

温泉地	玉川温泉	乳頭温泉郷
救急病院までアクセス	60キロ	40キロ
医療	無医地区	無医地区
入浴目的	湯治・代替療法	観光
温泉入浴指導員資格取得	なし	積極的
健康相談室・看護師	常在	なし
Drヘリの使用	有り	なし
重症度	高い	一般
医療コンプライアンス	充分とは言えない	一般
地域医療への協力的性	積極的とは言えない	協力的

考察

協調体制の構築

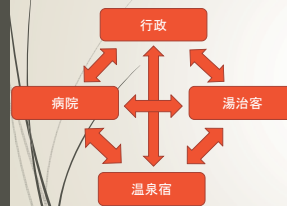
13

- 元々医療アクセスが困難であったが、田沢湖病院の救急指定返上によって、さらに医療アクセスが困難になった。
- 代替医療としての湯治が、医療空白地に重症患者を集めることになった。
- 脆弱な地域医療資源の下で、温泉地からの救急患者が、地域救急医療にダメージを与えた。

考察

望ましい四者間協調構造

14



地域の乏しい医療資源の中で、観光産業としての湯治を維持することを考えると、すべてのステークホルダーの協調が必要である。

- ① 行政 ⇄ 病院
- ② 病院 ⇄ 温泉宿
- ③ 温泉宿 ⇄ 湯治客
- ④ 湯治客 ⇄ 行政
- ⑤ 病院 ⇄ 湯治客
- ⑥ 行政 ⇄ 温泉宿

結論

玉川温泉地区と仙北市の地域医療の協調

15

- 玉川温泉での湯治が、地域の救急医療に負荷をかけていた。医師数の減少で負荷に耐えられなくなり田沢湖病院は救急指定を返上した。
- 玉川温泉は安全に湯治ができる環境とは言えず、湯治をサポートする医療環境づくりが必要で、すべてのステークホルダーの協調が不可欠である。
- 病院・行政・温泉宿・湯治客のそれぞれが、それぞれの立場を理解して、温泉を活用することが必要である。

謝辞

16

- 本研究は日本健康開発財団の研究費助成金によって実施しました。
- 本研究においては、仙北市・大曲仙北広域市町村圏組合消防本部・田沢湖観光協会の協力をいただき、実施させていただきました。
- 協力していただいた皆様に、心より感謝申し上げます。